

『藤篋冊子』源氏物語和歌注釈稿（上）

山本 綏子

秋成の「源氏物語」観を考えるための資料としては、『雨月物語』をはじめとして、「ぬば玉の巻」や『藤篋冊子』巻三「秋山記」における物語論がよく知られている。これらと並んで見逃せないものが、『藤篋冊子』巻二に収められた、『源氏物語』各巻を題とする五十四首の和歌である。ここには、次のような詞書が付されている（引用は、新日本古典文学大系『近世歌文集 下』（岩波書店）による。以下、「新大系」）。

冬の夜のながきをかこつ老をあはれみて、かたはらに在人の、
 何くれとなくさめかねつるあまりに、光源氏の物がたりを、つ
 ぶくよとよみて聞ゆ。一夜に一まき、或は二巻、長きはふた夜
 三よにも、巻々の終るごとに、是があたひに、歌よむべく云。
 いなまでよみつるが、そのころをやたがへつらんもしらず。
 いみじきをこわざなりけらし、

「かたはらに在人」が夜毎『源氏物語』を読み聞かせてくれ、その礼として詠んでいた和歌であるという。「そのころをやたがへつらんもしらず」と、独りよがりな解釈による歌であると謙遜して

はいるが、これらの和歌は秋成の『源氏物語』に対する意識をうかがい知る上で重要な手がかりを与えてくれるだろう。

さて、私事であるが、筆者が藤女子大学に赴任してから三年が経った。三年間、「日本文学演習ⅡA」という三年次以上を対象とした授業において、この秋成の五十四首の和歌の注釈を試みてきた。一時間に注釈するのは一首のみ。時には一時間では終わらないこともある。一字一句、一つ一つの表現を、できる限り徹底的に吟味したいとの思いから、敢えてこのペースで読解を続けてきた。そして今年度、ようやく五十四首すべてを注釈し終えることができた。

この五十四首の和歌には、既に新大系の注と現代語訳とが備わる。授業では、その成果に胸を借りるつもりで、新大系説をさらに発展させることを学生に課した。学生ならではの、柔軟な発想による解釈が示されることを期待したのである。もちろん、自由さの余り放縱に陥ることは避けなければならない。そこで、授業では、あくまでも『源氏物語』本文に即して秋成の着眼点を探ることを第一の目的とした。新大系が、おそらく脚注という制約もあったため

あろう、充分に『源氏物語』本文とのかかわりを指摘していないことを視野に入れてのことである。

瑣末なことにこだわることのないような作業であったが、『源氏物語』そのものの魅力のおかげもあって、どの年度でも学生達は意欲的に取り組んでくれた。その甲斐あって、『源氏物語』本文と細かく照合した上での指摘や、新大系とは異なる解釈がなされる歌も少なからず出てきた。そうした成果が蓄積するにつれ、何らかの形でまとめ、検討材料の一つとして公にする意義もあるのではとの思いが強くなっていった。ただ、『源氏物語』にも和歌にも暗い筆者である。十分に指導ができたとは言いがたく、また秋成が依拠した『源氏物語』のテキストが何であったのか明らかにできていない等の課題を多分に残している。そうした点からためらううちに機会を逃し続けていたところ、『源氏物語』千年紀に巡り会った。学生の所属する学会誌である本誌で、『源氏物語』の特集を組むという。さらに、二〇〇九年は、秋成の没後二〇〇年目にあたると。これ以上の好機はないと考え、発表の場をいただくことにした次第である。

授業をもとに本稿を作成するにあたって、筆者の判断によって次のような措置をとった。

- ① 授業で学生が提示した語釈・注釈等に関する資料から、必要に応じて取捨選択し、また場合によっては補って、注として記した。

- ② 『源氏物語』のテキストは、授業では便宜的に新編日本古典

文学全集（小学館）等の現代の注釈書によったが、本稿ではなるべく秋成が目にした可能性が高いものをとの考えから、『源氏物語湖月抄』によることとした。

- ③ 現代語訳は、学生が提示したものをもとにして、適宜修正を加えてまとめた。

- ④ 授業において学生から複数の解釈が提示された場合などは、蓋然性の高いと思われる方の解釈をとった。

これらのことから、本稿の責任は筆者に帰すものとする。本稿をなすにあたって一つ一つ整理しなおしてみると、秋成が『源氏物語』の表現に相当忠実に和歌を作っている様が、改めて浮かび上がってきた。これも学生達の努力の賜である。三年間の、それぞれの年度における演習担当者名を次に記し、敬意を表する。

二〇〇六年度

岩谷 薫 藤井 智子 村屋 木の実 柳生 裕美

山藤 祐代 小嶋 由希子

二〇〇七年度

鎌田 茜 鎌田 明華 松川 美郷 松山 美加

岩谷 薫 藤井 智子 松原 和美 村屋 木の実

柳生 裕美 山藤 祐代

二〇〇八年度

大谷 春奈 沖崎 未来 小野寺 景子 長嶋 明日香

横倉 李奈 丹治 明里 松山 美加 岩谷 薫

村屋 木の実

凡例

- 一、本文は、新大系によった。ただし、漢字の表記を現在通行のものに改め、適宜板本も参照した。
- 一、詞書については、注釈は省略した。
- 一、歌番号は、新大系に従った。
- 一、各歌について、本文・注・現代語訳の順に記した。
- 一、紙幅の都合上、基本的な語の説明はできるだけ省略し、『源氏物語』本文とのかかわりに重点を置いて記した。
- 一、『源氏物語』の引用は、『源氏物語湖月抄』（講談社学術文庫）による。引用の末尾に、巻名をへくで括弧して示した。読解の便を図って、漢字・おとり字の表記を現在通行のものに改め、筆者の注を（ ）で括弧して記した。また、一部私に傍線を付した。
- 一、和歌の引用は、特にことわらない限り、『新編 国歌大観』CD-ROM版（角川書店）による。

一、本稿に用いた文献等の略称は、次の通りである。

〈日国〉 日本国語大辞典WEB版「日国オンライン」
(<http://nikkoku.japanknowledge.com/>)

〈角古〉 『角川古語大辞典』CD-ROM版

〈歌ことば〉 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』

（角川書店）

〈歌枕〉 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』（笠間書

院）

一、新大系に既に指摘があるものは、原則として省略した。ただし、新大系の指摘に言及する必要がある場合は、その旨が明確になるように記した。

一、各歌の末尾に、演習担当者を（ ）で括弧して示した。

【本文】

桐壺

608 よひのまにはかなの月は人にけりねためる雲をかけしながらに

【注】

○ よひ……「儂きものの儂さを際立たせる時間という意識があったかとも考えられる。」〈歌ことば〉

○ よひのまにはかなの……「よひのまははかなく見ゆる夏虫に迷ひまされるこひもするかな」（古今・恋歌一・五六一・紀友則）。

○ 月……桐壺更衣亡き後、嘆き暮らす桐壺帝が、更衣の実家に思いをさせて詠んだ歌、「雲のうへもなみだにくるる秋の月いかですむらんあさぢふの宿」〈桐壺〉がある。なお、この場面の直前には、あてつけるかのように月に興じる弘徽殿女御の様子が描かれている。

風のおと虫のねにつけて、もののみかなしうおぼさるるに、弘徽殿には、ひさしううへの御つばねにもまうのぼり給はず、月のおもしろきに、夜ふくるまであそびをぞし給ふなる。いとすさまじう、ものしときこしめす。〈桐壺〉

○ よひのまにはかなの月は人にけり……桐壺更衣は、夜半過ぎに息を引き取る（「夜なかうちすぐるほどになん、たえはて給ひぬる」とてなきさわけば、）〈桐壺〉。

【現代語訳】

宵のあいだに、はかない月は沈んでしまった。（月を）妬んで（隠そうとして）いる雲を掛けたままで。（宵のあいだに、はかない桐壺更衣は亡くなってしまった。更衣に対する弘徽殿女御の妬みを身に受けたままで。）

〔柳生〕

【本文】

帚木

609 さまぐに定めあらそふ人の上にはては心もさみだるゝ空

【注】

○ さみだるゝ……「おほかたにさみだる」とや思ふらむ君恋ひわたる今日のながめを」（和泉式部日記）など、心も晴れず物思いにふける心情とともによまれることが多かった。」〈歌枕〉。

○ はては心もさみだるゝ……雨夜の品定め場面を経て、源氏は藤壺への思いを募らせる。

君は人（＝藤壺）ひとりの御ありさまを、心のうちに思ひつづけたまふ。これは、たらずまたさしすぎたることなくものし給ひけるかなと、ありがたきにも、いとどむねふたがる。

〈帚木〉

【現代語訳】

様々に女性の品定めをする人々の上に（広がる空のように）、ついには心も五月雨が降る空と同じく（、藤壺への想いが一層強まり）乱れてしまったことよ。（源氏の心境）

〔岩谷〕

【本文】

空蟬

610 やり水のほまれの門をひき入る車は恋の重荷なりけり

【注】

○ やり水のほまれの門……「紀伊守邸を源氏が訪れたときの様子、」紀伊守驚きて、遣り水の面目と、かしこまりよろこぶ」（帚木）による。〈新大系〉。

以前源氏は方違えの際に、遣水の評判を聞いて紀伊守邸を訪れていた。

『きのかみにてしたしくつかうまつる人の、中河のわたりなる家なん、この頃水せきいれて、すずしきかげに侍る』ときこゆ。〈帚木〉

訪れた紀伊守邸の遣水は、「水の心ばへなど、さるかたにをかしくしなしたり。」〈帚木〉と、評判に違わず風情あるものであった。○ 門をひき入る車……小君が、源氏の邸から紀伊守邸に戻る際

に、自分が乗って帰る車に源氏を乗せ、紀伊守邸の門が閉まらないうちにと源氏を邸に引き入れたこと（「わが車にてゐて奉る。（中略）門などささめさきにといそぎおはす。ひとみぬかたよりひきいれて、おろしたてまつる。」〈空蟬〉）をいう。

○ 恋の重荷……謡曲「恋重荷」は、軽そうに見えて実は重い、美しい荷をめぐる作で、恋が重荷にたとえられている。三度目の紀伊守邸訪問で、源氏は軒端萩と契る。以降、空蟬のつれない態度に思い悩む源氏、源氏に言い寄られて重圧を感じる空蟬に加えて、軒端萩までもが恋に悩むようになる。また、小君も源氏と空蟬との板挟みとなる。

【現代語訳】

遣水が自慢の（紀伊守邸の）門から（小君が源氏を）引き入れる車は、（さながら）恋の重荷（という）やかいかいごとを引き入れたようなもの）であったことよ。

〔山藤〕

【本文】

夕顔

611 けやすしと思はばなどてよりて見ん明るをまため夕がほの露

【注】

○ けやすしと思はばなどてよりて見ん……夕顔亡き後、源氏がはかない運命を嘆き、夕顔との出会い自体を恨めしく思う場面をふ

まえている。

はかなかりし夕より、あやしうころにかかりて、あながちにみ奉りしも、かかるべきちぎりにこそは物し給ひけめと思ふも、哀になん、又うちかへしつらうおぼゆる。〈夕顔〉

【現代語訳】

消えやすいと分かっていたなら、どうして近寄ってみるだろう（いや、見ない）。（夜が）明けるのを待たない（で消えてしまった）夕顔の露を。（こんなに早く別れが来ると分かっていたなら、どうして逢うだろう（いや、逢わない））。（夜が）明けるのを待たない（で亡くなってしまった）夕顔の君に。（源氏の心境）

〔村屋〕

【本文】

若紫

612 九重の北山ざくら咲にけりかけし霞も名残なき空

【注】

○ 九重……「物が幾重にも重なること。」「宮中。」「日国。」

○ 北山ざくら……源氏が北山の人々に贈った和歌「面かげは身をもはなれず山桜心のかぎりとめてこしかど」（若紫）において、若紫は山桜にたとえられている。

○ 九重の北山ざくら……「宮中の人をしのばせる」「藤壺に似た美しい少女」（新大系）。

北山で若紫の姿を垣間見た源氏は、「さるはかぎりなく心をつくし聞ゆるひとに、いとようにたてまつれるが、まもらるるなりけりと思ふにも泪ぞおつる。」(若紫)と、若紫に藤壺のおもかけを見る。そして、「かの人の御かはりに、明くれのなぐさみにもみばや、と思ふ心ふかうつきぬ。」(若紫)と、藤壺の身代わりとして若紫を育てたいと考える。

○ 北山ざくら・霞……病にかかった源氏が、加持を受けるために赴いた北山の様子は、「山のさくらはまださかりにて、いりもておはするままだに、霞のたたずまひもをかしうみゆれば、」(若紫)とある。

○ かけし霞も名残なき……「かけし霞」は、「藤壺に対する恋慕から心が鬱屈していたことをいう。」(新大系。引き取った若紫との生活は、源氏にとって、「もろ共にあそびつつ、こよなきもののおもひのまぎらはしなり。」(若紫)と、藤壺との恋愛にまつわる煩悶を紛らわせるものであった。

【現代語訳】

(宮中にいる藤壺のおもかけのある)八重咲きの北山の山桜が咲いている(ように、若紫が愛らしい様子でいる)。(その様子に)かかっていた霞もまったく空(のように、藤壺についての物思いも紛れて晴れやかな心)であることだ。(源氏の心境)

(藤井)

【本文】

末摘花

613 中川にことよき橋をわたされて見るめなき野を分もこしかな

【注】

○ 中川……「男女の仲にかけることが多い。」(角古)

○ ことよき……「ことばが巧みである。口先がうまい。」(日国)。「宮木がもとへしば来て、言よくいひこしらふれど、露したがふ色めなし。」(春雨物語・宮木が塚(引用は、日本古典文学大系『上田秋成集』による)。

また、「こと」(言)に、琴を掛ける。大輔命婦は「きん(左注「琴」)をぞなつかしきかたらひ人とおもへる」(末摘花)姫君として、末摘花の噂を源氏の耳に入れる。源氏は、末摘花の琴を聞くという名目で、常陸宮邸を訪れる。末摘花の琴を聞いた源氏は、奥ゆかしい程度のところできり上げる命婦の演出も手伝って、末摘花への興味を深くする。

【現代語訳】

中川(という男女(源氏と末摘花)の間)に、(琴を良いきかけとして)巧みな橋を渡(すように言葉巧みな仲立ちを)されて、(源氏は)みずばらしい野をよくぞ分けて(見栄えのしない末摘花に会い)来たことであるよ。

(小嶋)

【本文】

紅葉賀

614 もみぢ葉の光をけふは照そへて千秋と君をいはふべらなり

【注】

○ もみぢ葉……桐壺帝による朱雀院行幸の際、源氏が青海波を舞う場面に、「こだかき紅葉のかげに、四十人のかいしろ、いひしらず吹きたてたる物の音どもに、(中略)色々にちりかふ木のはのなかより、青海波のかがやき出でたるさま、いとおそろしきまでみゆ。かざしの紅葉いたうちりすきて、かほのにはひにけおされたるこちすれば」(紅葉賀)とある。

○ 照りそへて……行幸の試楽の場面で、源氏の様子は、「かほの色あひまさりて、つねよりもひかるとみえ給ふ。」(紅葉賀)とある。

○ 千秋……「長い年月。永久。永遠。」(日国)。

○ 君をいはふ……桐壺帝による朱雀院への行幸は、先帝の御賀のために行われた。

○ もみぢ・千秋・君……「風にちるかるきもみぢのいろいろは千秋にあかぬ君が御為に」(藤篋冊子・四・六九七)。

【現代語訳】

紅葉が光を受けて今日はいっそう輝きを増(すように、青海波を舞う源氏はいっそう美しさを増)して、末永くと君を寿ぐようだ。

(柳生)

【本文】

花宴

615 かすむ夜もしづえやすげに手折らるゝ薄花桜色にほひて

【注】

○ かすむ夜・桜……源氏が後の証拠にと取り替えた朧月夜の扇は、「さくらのみへがさねにて、こき方にかすめる月をかきて、水にうつしたる心ばへ」(花宴)というものであった。

○ 薄花桜色にほひて……朧月夜が登場する場面では、「いとわかうをかしげなるこゑの、なべての人とは聞えぬ、『おぼろづきよににる物ぞなき』とうちずんじて、こなたさまにくるものか。」(花宴)とあって、朧月夜は姿が見えなくても趣深く気品がにじむ女性として描かれている。「曙の薄花さくら忘れめやばたにのいろににははざりせば」(藤篋冊子・一・一九八・黙軒)。

【現代語訳】

霞があった夜で(物がよく見えなくて)も、下枝を簡単に手折られる薄花桜(のような朧月夜の君)であることよ。(あまりにも)美しい艶麗な香(のように深い趣)を漂わせているので。

(石谷)

【本文】

葵

616 わりなしやねたさひとつのうき瀬には人をも身をも沈めつる哉

【注】

○ わりなしや……六条御息所が、葵の上への嫉妬心から、自分の意志ではなく葵の上を苦しめていることを嘆き、我が身をもてあましている心境をいう。

あやしうわれにもあらぬ御心ちをおぼしつづくるに、(中略) 我が身ながらだにうとましようおぼさるるに、まして人のいひ思はむことなど、人にのたまふべきことならねば、心ひとつにおぼしなげくに、いとど御ころがはりもまさり行く。

〈葵〉

○ うき瀬……「つらい時、または、つらい境遇。思いのままにならない苦しい立場や状況。」〈日国〉。

【現代語訳】

どうしようもないことだ。妬ましき一筋のつらい境遇という川の瀬にあっては、他人をも自分の身をも沈めて(両者の身を滅ぼして)しまうものだ。〈六条御息所の心境〉

〔山藤〕

【本文】

さか木

617 神風の伊勢はそなたとさし櫛のさしてのらねば恋のしげけん

【注】

○ さし櫛……後に朱雀院(賢木)巻では朱雀帝が、前斎宮(六

条御息所の娘。「賢木」巻では斎宮)が入内する際に、

さしぐしのはこのころばに、

わかれちにそへしをぐしをかごとにてはるけき中と神や
いさめし(絵合)

と和歌を贈る。「賢木」巻における斎宮の伊勢下向を回想した和歌である。「わかれちにそへしをぐし」は、「中古、斎宮となった皇女もしくは女王が、伊勢へ出発するために参内して別れを告げた時、天皇がみずから斎宮の髪にさして与えた櫛。」〈日国〉。

○ 恋のしげけん……朱雀帝が斎宮に櫛を挿す場面で、斎宮の美しさに朱雀帝が心動かされる様子が描かれている。

斎宮は十四にぞ成り給ひける。いとうつくしうおはするさま
を、うるはしうしたて奉りたまへるぞ、いとゆゆしきまで見
え給ふを、みかど御心つごきて、別の御ぐしたてまつり給ふ、
いとあはれにてはたれさせ給ひぬ。〈賢木〉

【現代語訳】

神の威徳によって吹く風が伊勢はそちらだと指し示している。
(御櫛の儀で帝が斎宮に挿す)挿櫛が挿して(も頭に)乗らないと、
(朱雀帝の斎宮への)恋心がますます募ったことだろう。(結局は、
朱雀帝の想いとは裏腹に、斎宮は伊勢へと旅立ってしまった。)

〔村屋〕

【本文】

花散里

618 色は香にまけてにはへる橘の花散宿もたえずとはまし

【注】

○ 橘……「特にその香は昔をしのばせるものとして和歌に詠まれることが多かった。」〈角古〉。「花散里」巻において源氏は、麗景殿女御（亡き桐壺院の女御。花散里の姉）の邸を訪れ、院の生前を女御と懐かしく語り、歌を詠み交わすなどして、心慰める。

○ 色は香にまけてにはへる橘の……「花散里の美しさにはやや欠けるが、心安らぐ人柄をいう。」〈新大系〉。後に、源氏と紫の上との理想的な夫婦仲について、夕霧が紫の上と養母花散里とを比較し、花散里の容貌が劣っていることを思う場面がある。

（夕霧は）なほふと（紫の上のことを）おぼえつつ、きしかた行すゑありがたうも物し給ひけるかな、かかる（源氏と紫の上との）御なからひに、いかでひんがしの御かた（＝花散里）、さる物のかずにてたちならび給ひつらん、たとしへなかりけりや、あないとほしとおぼゆ。〈野分〉

そのような花散里と源氏は、「なさけをかはしつ、すぐし給ふ」〈花散里〉という、心が通じ合う仲である。

また、麗景殿女御の住まいが、にぎやかさはないが（「人めなくしづかにておはする有様」〈花散里〉）、源氏にとって慕わしいもの（「ちかかきたばなのかをりなつかしくにはひて、」〈花散里〉）であることさう。

○ 橘・花散宿……源氏が麗景殿女御に対して詠んだ歌、「たち花のかをなつかしみほととぎすはなちる里をたづねてぞとふ」〈花散里〉と、それに対する女御の歌「ひとめなくあれたるやどはたちばなのはなこそきのつまとりけれ」〈花散里〉による。

○ まし……「中世以降の擬古文や歌で、「む」とはば同じ推量や意志を表わすのに用いる。」〈日国〉。

【現代語訳】

姿形は香りよりも劣る（ように華やかではない）ものの、よく香っている（て慕わしい思いのする）橘の花が散る（麗景殿の女御の）邸（と、そこにいる花散里のもと）も、絶えることなく訪れよう。〈源氏の心境〉

〔藤井〕

【本文】

須磨

619 心から身は山がつにやつせども猶こりずまのうらなげきして

【注】

○ 心から……「みずから無冠の人となつて、須磨に退去したことをいう。」〈新大系〉。

世の中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、せめてしらすがほにありへても、是よりまさることもやとおぼしなりぬ。〈須磨〉

○ こりずまのうら……源氏が須磨から朧月夜に贈った歌、「こりずまの浦のみるめゆかしきをしほやくあまやいかがおもはん」
 〈須磨〉による。

【現代語訳】

自ら求めて（須磨に流離し、）身は田舎の卑しい身分にやつす（はずだった）けれど、それでもなお（源氏は）懲りもせず、須磨の浦で（須磨への流離の原因にもなった朧月夜に逢いたいと）しみじみと嘆いていることよ。

〔小嶋〕

【本文】

明石

620 都にもひゞきの灘の汐あひにかづく白玉誰にさづげむ

【注】

○ ひゞきの灘……「播磨国の歌枕。（中略）航海の難所とされた。」
 〈角古〉。「響く」には「評判になる」「騒ぎ立てる」意があり、（中略）また一方で、暴風に荒波の逆巻く騒がしい海というイメージも形成されるに至った。〈歌ことば〉。

「玉鬘」巻において、玉鬘が上京する際に、

ひびきのなだもなだらかにすぎぬ。（中略）

うきことにむねのみさわぐひびきにはひびきのなだもさ

はらざりけり〈玉鬘〉

とある。

○ かづく……「水の中にもぐる。」〈日国〉。明石の入道は明石の君に、入道の考えの通りに事が運ばなければ、「うみにいりね」とつねにゆいごんし」〈若紫〉ていた。その噂を聞いた源氏は、「なに心ありて、海的那こまでふかう思ひいるらん。」〈若紫〉と言っている。

○ ひゞきの灘の汐あひにかづく白玉……明石の君が、容易には手に入れることができない娘として評判であることをいう。都では、美しい明石の君への数々の求婚を、父親である明石の入道が一向に受け付けないことが評判になっている。

けしうはあらず、かたち心ばせなど侍ルなり。代々のくにのつかさなど、よいいことにして、さる心ばへみすなれど、さらうけひかず。〈若紫〉

【現代語訳】

都でも（航海の難所として）知られるひびきの灘の潮合いに潜っている白玉（のように、都でも手に入れ難いと評判の、田舎の地に埋もれている美しく大切な娘）を（明石の入道は）誰に捧げるのだろうか。

〔柳生〕

【本文】

浮漂

621 忘らるゝ身はかつしれど墨江の浜によりこしかひは有けり

【注】

○ 忘らるゝ身はかつしれど……源氏は京に戻ってからも、「かのあかしに心ぐるしげなりしことはいかにと、おぼしわする時なけれ」〔落標〕と、明石の君のことを忘れることはなく、明石の姫君のために乳母を選んだり、出産祝いを遣わすなどする。それに対して明石の君は、「この御心おきて（＝源氏の心遣い）のすこし物思ひなぐさめらるる」〔落標〕と源氏の思いやりを感じて心慰められつつも、「うきものは我身にこそありけれ、と思ひつづげ」〔落標〕で自分の身分の低さを嘆き、「かずならぬみしまぐれに鳴くたづをけふもいかにととふ人ぞなき」〔落標〕という和歌を詠む。

また、住吉参詣で偶然源氏が参詣する壮麗な様子を目にした際にも、「なかなかこのありさまをはるかにみたてまつるに、身の程くちをしう覚ゆ」〔落標〕と、かえって思い知る身分の低さを嘆き、「かずならぬ身」〔落標〕と自らを呼び、「かずならでなにはのことかひなきになどみをつくし思ひそめけん」〔落標〕と和歌を詠む。

○ かひは有けり……住吉参詣をきっかけに、源氏が明石の君を京へ迎えようと使いを出したことをいう。

【現代語訳】

（源氏に）忘れられる（ような低い）身分だということは同時に思

い知るけれど、（源氏から京へ来るようにとの仰せがあったので）住吉の浜に（参詣に）やって来た甲斐はあったことよ。（明石の君の心境）

〔岩倉〕

【本文】

蓬生

622 藤なみのかけてまつとはとひてしる露ふる宮の門のしるしに

【注】

○ 藤なみのかけてまつ……源氏は、荒れ果てた家を通り過ぎる際に、見覚えのある木立に目をとめ、末摘花の住む邸であることに気付く。

かたもなくあれたる家の、こだちしげくもりのやうなるをすぎ給ふ。おほきなる松に藤の咲きかかりて、月かげになびきたる、風につきてさとははふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。（中略）みし心ちするこだち哉とおぼすは、はやう此宮なりけり。〔蓬生〕

○ まつとはとひてしる……惟光を邸内に遣わしてはじめて、末摘花が自分を待ち続けていることを源氏は知る。

【現代語訳】

藤波が松に掛かってても（荒れた邸で、末摘花がひたすら源氏を）待っているとは、訪れて（はじめて）知ることだ。（その松が）露の

降りている（草だらけの）古い邸の目印となつて。

〔山藤〕

【本文】

関屋

623 心にはゆるせし関にあふ坂の山した雫袖ぬらしけり

【注】

○ 心にはゆるせし関……内心では源氏を慕いながらも、身分も低く人妻であるという自身の境遇から、源氏に心を開かないでいる空蟬の心境をいう。

心の中には、いとかくしなさだまりぬる身のおぼえならで、
すぎにしおやの御けはひとまれる古郷ながら、たまさかにも
まちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし、〔帚木〕

○ ゆるせし関にあふ坂の……空蟬の和歌、「あふさかの関やいかなるせきなればしげき歎のなかをわくらん」〔関屋〕がある。「あふ坂のゆるさぬ関にたたずみて時雨をよそに過しつるかな」〔藤篋冊子・二・四七六〕。

○ 山した雫……山下水は、「山中で草木の下に隠れて流れる水。

山の下水（したみづ）。表面に表せない恋の心をたとえることが多い。〕〔角古〕。「雨ふかみけさは岩井の水こえて山下しづく音まさるなり」〔藤篋冊子・二・六八六〕。なお、『新編 国歌大観』CD-ROM版には、ほかに「山下水」の用例はない。山の草木

の下で、人知れず滴る雫の意か。

源氏と空蟬が逢坂の関で偶然行き合わせた時、空蟬は表沙汰にできない想いに心を乱す。

女（＝空蟬）も人しれずむかしのことわすれねば、とり返し
てものあはれなり。

ゆくとくとくせきとめがたきなみだをやたえぬし水と人は
みるらん

（源氏は自分（＝空蟬）の心を）えしり給はじかしとおもふ
に、いとかひなし。〔関屋〕

【現代語訳】

心では許した（けれど、自分の境遇ゆえに隔てられている）関（の）
ような状態で（源氏と）出会う逢坂山の、山の（草木の）下で（密
かに）滴る雫（のように、人知れずこぼす涙）が袖を濡らすことよ。
〔空蟬の心境〕

〔村屋〕

【本文】

絵合

624 須まの浦にすみはてじと絵にうつしことにかこちてけふを待
けり

【注】

○ 絵にうつしことにかこちて……齋宮の女御方と弘徽殿女御方と

の絵合で、源氏が出品した日記絵は、

(源氏が)「こころのかぎり思ひすましてしづかにかきたまへるは、たとふべきかたなし。(中略)(須磨に)おはしけん有さま、御心におぼしけんことども、ただ今のやうにみゆ。所々、おぼつかなきうらうらいそのかくれなくかきあらはし給へり。〈絵合〉

というものであった。

○ けふ……栄華の頂点に登りつめる日。「絵合」巻で、源氏は、「よはひたらでつかさくらめたかくのぼり、世にぬけぬるひと」〈絵合〉であることを自覚し、「此世には、身の程おぼえすぎにけり」〈絵合〉と、我が身の栄華を実感する。

【現代語訳】

須磨の浦で(決して)一生を終えはしないつもりだと(日記絵を描いて、そこでの暮らしや心境などを)絵に表現し言葉に込めて、今日(という都で栄華を極める日)を待ったことだ。〈源氏の心境〉

〔藤井〕

【本文】

松風

625 うつり来て我宿ながら明石がたなれし岡辺の松のあらしか

【注】

○ 岡辺・松のあらし……「明石」巻における明石の君の住まいの

描写、「かのをかべの家も、(琴の音が)松のひびきなみの音にあひて、「明石」をふまえる。

○ 松のあらし……「松の梢に吹く風。松風。」〈日国〉。「松風」と近いが、それよりも激しく吹くものとして歌に詠み込まれる。(中略)深山に隠棲する人の孤独な心情を深化させるものとして詠み込まれることが多い。〈歌ことば〉。

明石の君が、望郷の念と寂寥感から琴を弾く場面がある。

なかなかもの思ひつづけられて、すてし家ぬも恋しうつれづれなれば、かの御かたみのきんをかきならすをりのいみじう忍びがたければ、人ばなれたるかたにうちとけて、すこしひくに、松風はしたなくひびきあひたり。〈松風〉

また、明石の君の歌に、「かはらじとちぎりしことをたのみにて松のひびきにねをそへしかな」〈松風〉がある。「明石」巻でも、明石の入道が、「山ぶしのひがみに、松風をききわたしはべるにやあらん。」〈明石〉と、娘である明石の君の琴の音を松風と聞き間違えたのではと源氏に語っていた。

【現代語訳】

(大堰に)移り住んで、(大堰の家が)我が家でありながら、明石(が恋しいこと)よ。(故郷恋しさに爪弾く琴の音は)なじみ深い(明石の)岡辺に吹く松の嵐(の音)か(と思われて寂寥感がこみ上げてくる)。〈明石の君の心境〉

〔小嶋〕

〔付記〕

本稿は、平成二十年度科学研究費補助金基盤研究（C）「近世冷泉派歌壇の伝存資料についての研究」による研究成果の一部である。

〈やまもと すいこ・本学専任講師〉

第七十九号 目次 二〇〇八年 十一月

中井覺庵『とはすがたり』を読む

——懷徳堂官許獲得運動の一側面—— ……山本 綏子

キリシタン版

『どちりいな・きりしたん』における

〳〵御座ます〳〵をめぐる………漆崎 正人

尾崎紅葉『多情多恨』の語りと語法（一）

——語りの性格—— ……揚妻 祐樹

卒業研究題目